

【随筆】もしも独逸で『舞姫』を読んだなら ドイツ留学日記より

著者	大野 寿子
著者別名	ONO Hisako, OHNO Hisako
雑誌名	東洋通信
巻	46
号	4.5
ページ	6-8
発行年	2009-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011026/

オアシス



もしも独逸で『舞姫』を読んだなら

—ドイツ留学日記より—

大野 寿子

ドイツ連邦共和国の真ん中あたり、ニーダーザクセン州に位置するゲッティンゲン (Göttingen) は、ハイデルベルク、マールブルク、テュービンゲン、イエナ等と並ぶ古い大学町である。コッホやフレールベル、シヨーペンハウアー、フンボルト、ハイネ等を輩出し、ガウスやグリム兄弟が教鞭を執ったゲッティンゲン大学を中心としたこの町は、いまは観光ルート「メルヘン街道」途上にあり、旧市庁舎前のマルクト広場にある、グリム童話にちなんだ「ガチョウ番の娘リーゼル」の噴水 (Brunnen) が、訪れる人々の心を癒している。一九九九年秋より約一年間、ドイツ学術交流会 (DAAD) の奨学生として、このゲッティンゲン大学に留学する機会を得た筆者は、渡独後約半年たった春休みのある日、ドイツを舞台とした森鷗外の作品を、ドイツの風景の中で読みたいという衝動に駆られ、『舞姫』の文庫本を

片手に中心街へと出かけていった。ベルリンとゲッティンゲン。話の舞台としては若干異なりはするものの、太田豊太郎の物語を読み進めるにつれ、作品中のドイツ (プロイセン) の風景と、目の前で繰り広げられるドイツの日常生活との境がなくなり、双方入り混じって別の世界を形成していくような不思議な感覚を覚えた。自分が、作品の中、あるいはドイツの中に溶け込んでいったような気がしたのである。しかしその一方で、明治期の日本人の目からみたドイツ文化を綴る、日本語のいささか古い文体に、さらには日本語そのものに、郷愁を覚えアイデンティティを強く意識した瞬間でもあった。この日の体験は、アルファベットにまみれた生活の中で、鷗外のすばらしい日本語に心当たりいだひとときだったといえよう。その感動と安らぎの中で、鷗外模倣に興じて走り書きした日記の一部を以下に記す。いま

思えば、鷗外を模倣できるはずはなく、所詮素人の戯れにすぎず、特に鷗外ファンの皆様には先んじてお詫び申し上げる。

* * *

春まだ浅き彌生半ばの晴れし日に、ヨハニス教会が傍らの腰掛にて讀書に耽りたり。敷石に映る未だ芽吹かぬ大樹の陰影、網の目の如し。風の戯れにて頁のはらはらとめくるをも興じ、時折聞こえ来る、子等の愛らしき聲に耳傾くる。日頃憎みし公車の騒音も、何時しかひと時の長閑なる風景に紛れり。彼の太田豊太郎は、伯林のケエニヒ辻の休息所にて、時の新聞に目を通ず。余はその件を、三時を告ぐる鐘の音聞きつつ讀みにけり。

鐘四時を打ちて、滑り往く路面の樹影幾ばくか長くなりぬ。頭中かぶりし母子の獨逸語ならざる言、傍らに聞こゆ。見当もつかぬ。豊太郎が露西亞に赴き舌人を勤めたる件を讀みて、彼の言の才に寄する羨みの情、異国にて勉強する我が身なればまた一入なり。さて、この西亜細亜風の子女の言に耳を傾け眺むるに、背後より携帯電話の電子音聞こゆ。興ざめて集中力途切れしも、この音の我が祖國を思ひ抱かせるはいとをかし。

ふと傍らの女子の、我が鞆の大猫写したる飾りに觸る。その面には笑みの浮かべり。余も返して微笑まじかや。また、余

の讀みし頁面に影映れり。彼の女子の、我が讀みたる文字に興じて背後より覗きければなり。その母の叱る。余は問題無しと獨逸語にて返す。その子、齡四つ五つに見ゆ。目前なる馬の玩具に乗り戯れしに、時折群成して飛びたる鳩に興を覚え、母に問ふ。母は何がしかの言を返し、傍らの紙袋より焼き菓子を取り出しその子に渡す。彼女はそれを千切りて投げけり。鳩の菓子に集ふを見るに興じてやまず。その母子の去るに、子が「では」と余に言ひつ。いとあやにくし。

何時しか日も陰り風強くなれり。彼の芳しき漆黒の飲料求め、教会が傍らに我高しと聳え建つ、カアルシユタツトなる百貨店のカフェに赴く。珈琲一杯ニマルク八〇ペニヒは、余ら学生には幾ばくか高価なれど、まだしも良心的なる値なり。二階の窓側に座して、先程まで座したる長椅子を眺むる。「マルクト」と稱する停車場の側にて、女衆男衆の往來、時過ぐることに増しにけり。邊りはやうやう夕闇の支配する處となりぬ。

ゲツチンゲンに來りし初、鉄道列車にて同國女子を一人見知りき。驛近くの仮初の宿に我が荷物を投げ出して後、彼女の寄宿舎を訪問ぬるも、学友諸君の歓待に時の経つのも憶えず。友曰く、「往路公車にてひたすら山を下るべし。停車場『マルクト』にて下車すれば、汝が宿に程近し。」時既に十一時を回して、マルクト附近に道を尋ぬる人も無し。酔ひたる男の雄叫び闇に響

き、木立のざわめきに心穏やかならず。時雨となりぬ。未だ馴染まぬ石畳に足元覚束ず、我が宿求め久遠の闇を彷徨いたり。

珈琲何時しか冷たくなりぬ。教会の鐘が六時を告ぐる。豊太郎は、大臣の為したる帰國要請に「承り侍り」と答ふ。数頁後に訪れる『舞姫』の哀しき結末は、おのが僑居、グリーンムを右に、アンデルセンを左に終日こつ座する、我が讀書の窓下にいてざ讀まん。

— おおの ひさこ・文学部准教授 —

*本稿は、日本グリム協会九州支部会報「グリム九州」第四〇号に掲載されたエッセイ「読書ノススメ」もしも『舞姫』を独逸で読んだなら—(ドイツ留学珍日記③)(二〇〇一年六月)をもとに、新たに作成したものである。

注

(1) 聖ヨハニス教会 (St. Johannis Kirche)。ゲッティンゲンの中心地旧市庁舎裏手に聳える、街のシンボルの一つ。塔の上には学生が住み、塔に上りたい者は、入場料を払うか、その学生のためにミネラルウォーターを持参することになってい。教会横は、石畳のちよつとした公園になっていて、ベンチや木馬等がおいてある。

(2) 当時人気のキャラクター「たればんだ」のこと。

(3) ドイツ語で「チュス」(Tschüs) という。

(4) ユーロ施行前のドイツの通貨単位。280DM(二マルク八〇ペニヒ)は、当時のレート(1DM=¥50)では約一四〇円。日本と比べれば安価であるが、例えばゲッティンゲン大学のキャフェテリアや学生食堂では、当時コーヒー一杯1.10DMだったもので、その二倍以上の値段ということになる。

(5) 注(1)の旧市庁舎正面に広がるのが、マルクト広場である。バス停「マルクト(広場)」(Markt)は、旧市庁舎の裏手、聖ヨハニス教会との間にある。一車線一方通行ながら、市営バスのほとんどの路線がここを通っているため、バスの往来と乗降客が絶えないにぎやかな一画である。

(6) 一九九九年九月三〇日にフランクフルト空港到着。そこからフランクフルト駅に出て、ドイツの新幹線といわれるICE (InterCity Express) でゲッティンゲンへ向かった。混み合った車内で同年代の東洋人女性に出会い、お互いのスーツケースや服装の雰囲気、お互いが日本人であることを察知し、どちらからともなく声をかけた。

(7) 日本より予約していた学生寮には到着の翌日入居した。彼女の寮は、小高い丘の上のボンヘーファー通り (Bonhoeferweg) という、ナチに抵抗した人物にちなんだ通りであった。